

あこう通信



「今日も楽しかった。明日も楽しみ。」と思える学校を創ろう

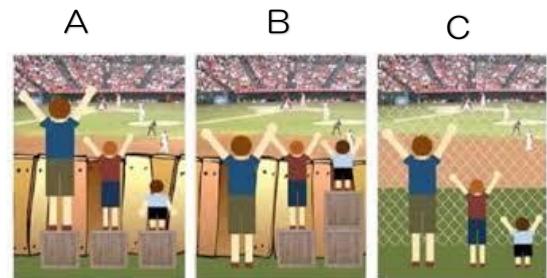
～「いい顔　いい声　いい心」～

発行：令和7年12月12日（金）NO.25 文責：副校长 津田 幸一

学校HP URL <http://www.nagasaki-city.ed.jp/kosakaki-e/index.html> (2次元コードからどうぞ)



人権教育



昨年度の19号再掲になりますが、人権について考える際によく例示される『壁越しに野球を見る3人』絵です。

最も人権に配慮しているのはCです。
OA…平等に箱が提供されていますが、小さな子には、グラウンド内が見えません。
OB…箱の数を個によって変え、3人全員が観戦できます。
OC…フェンスそのものを網に取り替えて、3人を含めた誰もが観戦できるようにしています。

Cの環境整備が、ユニバーサルデザインです。最も困っている人にとっての合理的な配慮を提供することが、すべての人にとって安心安全な環境であるというものです。

インクルーシブ社会の理念になっています。

さて、学校教育でも、ユニバーサルデザインの教室環境づくりに取り組むことが求められています。

すべての子供たちが学びやすいように、最初から多様なニーズを考慮して設計された環境です。

具体的には、

- ① 前面掲示の簡素化
- ② 机上整理のルールづくりと共通指導
- ③ 教材の多様化（視覚・聴覚に配慮）
- ④ 座席配置の柔軟性
- ⑤ 教室内の移動のしやすさ（段差の解消など）
- ⑥ 情報伝達手段の多角化

…などが挙げられます。

これにより、特別な支援を必要とする児童生徒だけでなく、誰もが主体的に学習に参加し、能力を最大限に発揮できる環境の実現を目指しています。

今月は人権集会を計画しています。

子供たちが、それぞれに「人権とは」ということについて考える機会です。

それなのに、どのようなことを考えるでしょう。

すべての子供たちが、「私OK、あなたOK」という、自己肯定感と他者受容感を感じることができるような、小学校にしていきたいですね。

この心情の育みが、「今日も楽しかった。明日も楽しみ。」と思える学校を創っていくのだと考えます。

「わたしOK」=自己肯定感

「あなたOK」=他者受容感

人権集会に向けて

- 人権に関する学習（各学級）
- 友達へのメッセージ
- 異学年交流
- あいさつ運動

12月10日に予定していた人権集会は、インフルエンザ流行のため、延期いたしました。
人権集会に向けて、上記の取組を、各学年・学級で取り組んでいます。
よい学びになっています！

『みんな違っているから、いいのです』

人権感覚で大切なことは、**他者が自分と違うことを受け入れること**だと思います。
少し前の映画ですが、『ぼくの生きる、二つの世界』をご存じでしょうか。

吉沢亮さん主演で、五十嵐大さんのエッセイ『ろうの両親から生まれたぼくが聴こえる世界と聴こえない世界を行き来して考えた30のこと』を原作にした映画です。

宮城県の小さな港町で暮らす五十嵐家に、大が生まれます。父の陽介と母の明子は耳が不自由でしたが、幼い大にとって、母の通訳をすることは当たり前の、楽しい日常でした。しかし、成長するにつれて、周囲から特別視されることに戸惑いや苛立ちを感じるようになります。時には、母の明るささえ疎ましく感じ、冷たい態度をとってしまうこともあります。

母への複雑な感情を持て余したまま20歳になった大は、自分の生い立ちを誰も知らない東京へ逃げるよう上京します。新しい環境でアルバイト生活を始める大ですが、そこでも様々な出会いを通じて、聞こえる世界と聞こえない世界の狭間で揺れ動く自分自身と向き合っていくことになります。

この映画は、コーダーという特殊な生い立ちを持つ主人公が、家族との関係や自分自身のアイデンティティと向き合いながら、少しずつ成長していく姿を繊細に描いています。

「きこえる世界」と「きこえない世界」という2つの異なる世界を行き来する大の姿は、多様性を受け入れ、異なる立場を理解することの重要性を示唆しています。

耳の聞こえない両親の存在によって、主人公の大（だい）は特別な目で見られることに苦悩しますが、最終的にはその経験が彼自身の強みとなり、2つの世界をつなぐ「橋渡し」の役割を担うことに生きる意味を見出しています。

この映画は、単に聞こえるか聞こえないかという違いだけでなく、あらゆる「違い」をどう受け止め、どう生きていくかという問いかけ私たちに投げかけます。